

尺度使用マニュアル

<尺度名>

幼児用問題行動尺度（保育者評定版）

<測定概念>

問題行動とは、発達上ないしは社会集団への適応上、問題となる行動（竹林，1999）と定義される。本尺度は、幼児の問題行動を「外在化問題行動」と「内在化問題行動」の2側面から測定するものである。Achenbach & Edelbrock（1978）による分類以来、子どもの問題行動は、攻撃行動や多動に代表される externalizing な行動と引きこもりに代表される internalizing な行動の2側面に大別できることが知られており、本尺度はそれと対応するものである。

<適用範囲>

幼児の問題行動の測定に適用する。

<尺度構成手続き>

まず、わが国の保育現場で実際に観察される行動であることや保育者が実際に評定可能であることを重視した尺度項目を作成した。続いて、保育者 100 名にこの尺度項目への回答を求めて、3歳から6歳までの幼児 1493 名（3歳男児 65 名・女児 65 名，4歳男児 197 名・女児 195 名，5歳男児 252 名・女児 259 名，6歳男児 230 名・女児 230 名）のデータを収集した。その後、収集したデータを用いて因子分析を行い、外在化問題行動と内在化問題行動の2因子を抽出した。続いて、外在化問題行動と内在化問題行動それぞれに含まれる項目から下位尺度を構成した。

<信頼性>

クロンバックの α 係数を算出し、外在化問題行動が $\alpha = .89$ ，内在化問題行動が $\alpha = .76$ との結果を得て尺度の内的整合性を確認した。

2時点（1カ月間隔）にわたる尺度得点の相関係数を算出し、外在化問題行動が $r = .98$ ，内在化問題行動が $r = .96$ との結果を得て尺度の安定性を確認した。

<妥当性>

尺度の併存的妥当性を検討するために、外在化問題行動得点，内在化問題行動得点それぞれと自由遊び場面における行動観察によって測定された孤立傾向値との間の相関係数を算出した。問題行動を示す子どもは仲間集団から孤立しやすい（佐藤，1996；佐藤ら，1993）。よって、外在化問題行動，内在化問題行動いずれの得点も孤立傾向値と正の相関が予測された。特に、内在化問題行動はその行動特徴からして外在化問題行動よりも強い相関が予測された。結果は、外在化問題行動が $r = .27$ ($p < .05$)，内在化問題行動が $r = .40$ ($p < .001$) と予測通りで、尺度の併存的妥当性が確認された。

<採点方法>

「質問は 13 項目あります。各項目をよく読んで、過去 1～2 ヶ月間の子どもの行動につ

いて思い出してください。子どもについてその行動が、まったくみられなかったら…1、少しみられたら…2、ときどきみられたら…3、よくみられたら…4、非常によくみられたら…5と、下の記入例を参考に書き入れてください。」と教示し、記入例を示した後、対象児の評定を求める。

下位尺度に含まれる項目の得点を加算し、下位尺度得点とする。

<尺度の使用について>

項目の改変は行わないほうが望ましい。外在化問題行動、内在化問題行動の2下位尺度をあわせて使用するのが望ましい。

<出典文献>

金山元春・中台佐喜子・磯部美良・岡村寿代・佐藤正二・佐藤容子 2006 幼児の問題行動の個人差を測定するための保育者評定尺度の開発 パーソナリティ研究, 14, 235-237.

<連絡先>

金山元春（広島大学大学院教育学研究科）

<無料・有料の別>

無料。

<著作権関連情報>

転載は著者の承諾を得ること。

文献

Achenbach, T., & Edelbrock, C. 1978 The classification of child psychopathology: A review and analysis of empirical efforts. *Psychological Bulletin*, 85, 1275-1301.

佐藤正二 1996 子どもの社会的スキル訓練 行動科学, 34(2), 11-22.

佐藤容子・佐藤正二・高山 巖 1993 攻撃的な幼児に対する社会的スキル訓練—コーチング法の使用と訓練の般化性— 行動療法研究, 19, 13-27.

竹林奈奈 1999 問題行動 氏原 寛・小川捷之・近藤邦夫・鑪幹八郎・東山紘久・村山正治・山中康裕（編） カウンセリング辞典 ミネルヴァ書房 p.612.